

論文 / 著書情報
Article / Book Information

題目(和文)	大正・昭和初期の都市整備に伴う近代大阪としての都市像形成に関する研究
Title(English)	
著者(和文)	吉本憲生
Author(English)	Norio Yoshimoto
出典(和文)	学位:博士(工学), 学位授与機関:東京工業大学, 報告番号:甲第9517号, 授与年月日:2014年3月26日, 学位の種別:課程博士, 審査員:篠野 志郎,安田 幸一,奥山 信一,室町 泰徳,那須 聖
Citation(English)	Degree:Doctor (Engineering), Conferring organization: Tokyo Institute of Technology, Report number:甲第9517号, Conferred date:2014/3/26, Degree Type:Course doctor, Examiner:,,,,
学位種別(和文)	博士論文
Category(English)	Doctoral Thesis
種別(和文)	論文要旨
Type(English)	Summary

(博士課程)
Doctoral Program

論文要旨

THESIS SUMMARY

専攻： Department of	人間環境システム	専攻	申請学位 (専攻分野)： Academic Degree Requested	博士 Doctor of	(工学)
学生氏名： Student's Name	吉本憲生		指導教員 (主)： Academic Advisor(main)	篠野志郎	教授
			指導教員 (副)： Academic Advisor(sub)		

要旨 (和文 2000 字程度)

Thesis Summary (approx.2000 Japanese Characters)

本論は、「大正・昭和初期の都市整備に伴う近代大阪としての都市像形成に関する研究」と題し、以下の7章から構成されている。

第1章「序論」では、本研究の背景と目的を示すとともに、研究の範囲と方法を明示している。まず、従来の近代大阪の都市整備に関する研究では、都市整備の実施内容・制度や、行政や都市計画家等による実施者の理念・構想について検討するものが大勢を占めているとともに、都市像・地域像に関する研究では、その検討対象地が大阪市街地南部の地域に限定されており、都市整備に伴う都市像の形成過程及び、都市像の保有主体としての都市整備の実施者と、住民等による受容者の関係については検討されてこなかったことを指摘している。以上を踏まえて本論の目的が、大正・昭和初期における大阪市を対象に、当該期における都市整備の実施に伴い、実施者・受容者の交渉を通して形成される、近代大阪としての都市像について史的に明らかにすることにあると述べている。

第2章「近代大阪における都市整備及び実態的都市空間」では、近世・明治期・大正昭和初期にかけての大阪の実態的な都市空間の変遷について、都市領域・街路網・景観の3つの観点から検討し、明治期の大阪においては、近世大坂の空間構造・景観を保持していたのに対し、大正・昭和初期においては、都市整備の実施に伴い、近世から継承された空間構造が遺棄されるとともに、企業施設としての高層建築が景観の中に出現し、御堂筋を中心とする新たな空間構造を持つ都市空間が形成されたことを指摘している。

第3章「大阪都市協会の機関雑誌『大大阪』にみる実施者による都市像」では、都市整備の実施者を読者・執筆者とする大阪都市協会の機関雑誌『大大阪』における記述について検討し、『大大阪』では、従前の私的領域の集合としての都市像が遺棄され、公的な領域の中に資本の運動を取り込むことを企図する新たな都市像が提示されるとともに、大正・昭和初期の都市整備の中心的な地域であった御堂筋・大阪駅周辺の地域像において、『大大阪』が目指す新たな都市像が先鋭化したことを指摘している。

第4章「郷土誌・新聞にみる受容者による都市像」では、都市整備の受容者を読者・執筆者とする郷土誌『上方』及び『大阪毎日新聞』・『大阪朝日新聞』における記述について検討し、『上方』では近世文化が重視されることで、道頓堀に代表される共同体の領域及びそれを統括する世俗権力の象徴としての大阪城及び、世俗から切り離された宗教の象徴としての四天王寺によって構成された都市像が形成される一方で、新聞では、御堂筋・大阪駅周辺を中心として、資本が運動する領域としての都市像が形成されたことを指摘している。また、『上方』において、都市像の拠点となる道頓堀に関して、従前の共同体の領域が資本家によりもたらされる大阪の外部の文化によって解体される過程が意識化されており、当該誌が出版された昭和初期の受容者においては、現状の都市は資本家による経済活動の領域として捉えられたことを指摘している。

第5章「都市整備に関する訴訟にみる実施者と受容者の場所評価の差異」では、大正・昭和初期の大阪における都市整備を契機として都市整備の実施者である行政と受容者である住民の間で生じた訴訟の内容について検討し、大規模な都市整備が実施された御堂筋・大阪駅周辺においては訴訟が集中するとともに、当該地における訴訟を通して、資本家によって経済的な利益が独占される中心地と、それに従属する周縁という空間構造が住民において意識化されたことを指摘している。

第6章「地域像の階層的集合による都市像の形成過程」では、前章までの検討を総合し、近代大阪としての都市像が、大阪市という公的主体を表象する大阪駅周辺と、経済活動を表象する御堂筋が接続されることで形成された、都市における経済活動の表象であるとともに、そこでは、大阪の外部の文化と繋がりをう近代における共時的な固有性に対し、大阪において通時的に形成される固有性が従属することで、都市空間が構造化されたことを明らかにしている。

第7章「結論」では、以上を総括して、本論の結論を述べている。

以上を要するに、本論文は、都市整備の実施者・受容者の関係に注目し、大正・昭和初期の都市整備の実施に伴う近代大阪としての都市像の形成について検討したものである。その結果、都市整備の実施に伴う都市像の形成過程については検討されてこなかった既往の近代大阪の都市史研究に対し、当該期に形成された近代大阪としての都市像が、都市整備の中心地であった御堂筋・大阪駅周辺を拠点とした公的主体と経済活動の表象であり、近代における共時的な固有性に対し、大阪における通時的な固有性が従属するものであったことを明らかにしており、近代大阪の都市史研究に対する新たな知見を提出している。

備考：論文要旨は、和文2000字と英文300語を1部ずつ提出するか、もしくは英文800語を1部提出してください。

Note：Thesis Summary should be submitted in either a copy of 2000 Japanese Characters and 300 Words (English) or 1copy of 800 Words (English).

(博士課程)
Doctoral Program

論文要旨

THESIS SUMMARY

専攻： 人間環境システム 専攻
Department of
学生氏名： 吉本憲生
Student's Name

申請学位(専攻分野)： 博士 (工学)
Academic Degree Requested Doctor of
指導教員(主)： 篠野志郎 教授
Academic Advisor(main)
指導教員(副)：
Academic Advisor(sub)

要旨(英文 300 語程度)
Thesis Summary (approx.300 English Words)

During the period between the Taisho and the early Showa era, the redevelopment of the Osaka metropolis was conspicuously enforced in the built-up area formed in the early modern times, under the guideline of the municipal officers and the urban planners. While they advanced the argument about the future urban configuration of Osaka in the journal, entitled as “*Dai-Osaka*” published by the *Osaka city Promotion Association*, ordinary citizens, as recipients perceiving the realized urban planning, came to share the urban image of Osaka through the magazines and newspapers of its sorts. The previous studies about modern Osaka, however, although dealing with various subjects on the modern urban history of Osaka, are likely to ignore configuration of the urban image generated by the mental interchange between the planners and the citizens. In such circumstances of research, this study aims to clarify the urban image configuration of the modern Osaka through the mental negotiation between the planners and the citizens.

As a result of analyzing the journal “*Dai-Osaka*”, the magazine “*Kamigata*” admiring the past culture of Osaka, the newspapers for the public, and the documents of the lawsuits at conflicts between the administrators and the citizens accompanied by the urban development, planners regarded the urban space as the homogeneous place which belonged to the public subject, notwithstanding that the citizens regarded the urban space as the representation of the economic activities by the capitalists.

In conclusion, the urban image of modern Osaka was shaped by the spatial conjunction of two urban units: the Osaka station as the public subject, corresponding to the representation of the economic activities in the city, and the boulevard Midosuji representing the economic activities. In its process, the synchronic identity, as a canon of modernity, extending homogeneously over the urban boundary to the external city, obtained an advantage over the diachronic identity acquired in the course of the localized time as a history.

備考：論文要旨は、和文 2000 字と英文 300 語を 1 部ずつ提出するか、もしくは英文 800 語を 1 部提出してください。

Note: Thesis Summary should be submitted in either a copy of 2000 Japanese Characters and 300 Words (English) or 1 copy of 800 Words (English).